オリジナル初級日本語教科書の改訂作業における方針・手順・方法

鶴町佳子

（原稿受理日　2004年4月2日）

はじめに

筆者が勤務するラチャパット大学アユタヤ校（以下RIアユタヤ）では、初級日本語文法を教えるのにオリジナルの教科書を使用している。これは1990年ごろから数年をかけて、当校のタイ人教師と当時勤務していた青年海外協力隊員が協力して作成したもので、作成以来少しずつ改訂が加えられながら使用されてきた。しかし、この教科書にはいくつかの問題点があり、使用した教師からは改訂を望む声があがっていた。さまざまな事情から改訂は長く見送られていたが、2002年3月、主要なタイ人教師が留学から戻り、また主専攻課程新規開設により教材整備を急ぎたいという状況があったことから、当校日本語プログラムはとうとう大々的な改訂に着手することになった。2002年6月からの使用に間に合わせるため、大規模な改訂は夏期休暇中である2002年3月から5月にかけて集中的に行われたが、それから2年経った2004年現在も、小規模な改訂が継続して行われている。

本稿においては、主に改訂開始後一年の間に行われた一連の改訂作業における、作業方針と作業手順、さらに具体的な方法について、報告、紹介する。筆者を含め、改訂に携わった者の多くは改訂開始前年度から当校に勤務し始めた者ばかりで、教師としての経験も浅く、長いスパンで用いる教材の作成経験など当然なかった。これに加え、作成当初の作成方針等が文書として残されていなかったため、我々は作業におけるあらゆる方針を考え直し、また方法も試行錯誤しながら、非常に苦労して作業にあたった。そして今また、改訂に携わった者のほとんどが当校を去ろうとしている。筆者は、今後教師が入れ変わろうとも継続されていくだろう改訂作業において、再び方針を一から考え直さなくてもすむよう、本稿が一種のマニュアルとなればとの思いで、本稿を執筆することにした。

1．改訂前の教科書の問題点

1.1. 教科書の概要

改訂することになった教科書は、「日本語1」から「日本語4」まで4冊あり、1学期に1冊、計4学期を使って初級文法を修了するための教科書である。国際学友会の『日本語Ⅰ』に準拠した文型シラバスで作成されている。4冊はそれぞれ目次、各課、提出漢字リストから構成されており、さらに各課は新出単語と表現・新出漢字、学ぶべき文型を盛り込んだ会話文、新出文型一覧、タイ語による文法説明、練習問題（宿題として課す）から成っている。このような構成になった理由は、本校の学生には経済的に余裕のない者が多いので、1冊で文法参考書としても練習帳としても使えるような教科書にしたいという作成者の意図があったためだと聞いている。

また、もともとこの教科書は、日本語を副専攻として学ぶ学生が、１年生の前期から２年生の後期にかけて学習するためのものとして作成されたそうである。2001年度に日本語主専攻課程を開設してからは、副専攻課程の学生のみならず、日本語主専攻の学生に対しても、同様に１年生前期から２年生後期にかけての初級文法学習に使用している。授業の形態は、タイ人教師が文法の導入、日本人教師が応用練習などを担当する、いわゆるティームティーチングである。

1.2　教科書の問題点

改訂の提案があったとき、提案者の教師から挙げられた問題点は次のようなものであった。

1）課の数が多すぎて４学期で終わりきれず、次の学期に持ち越してしまい、別の科目の時間を奪ってしまっている。

2）初級の教科書としては、提出文法・語彙に過不足があると感じる。

3）提出漢字が多すぎて、学生が覚えきれていない。

以上の問題点を解決するべく、改訂作業がスタートすることになった。

2．改訂作業の方針

2002年３月の時点で当校に常勤していた教師は、タイ人教師１名、日本人教師４名（筆者含む)。この５名全員で改訂作業にあたることになった。まず、会議をもって作業の方針について全員で話し合い、確認した。すなわち、作業の目標や迷ったときの基準を何にするかということである。以下にそれを示す。１）から３）までは、上記の問題点と一致している。

1）「日本語１」「日本語２」「日本語３」「日本語４」の連続する４つの科目の中で、初級文法が修了できるよう、課の数を削減する。36課あったものを34課にする。

2）初級文法修了の具体的な基準を日本語能力試験（以下、能力試験）の３級に合格できる程度とする。従って、能力試験３級の出題基準に照らし、提出文法・語彙の過不足を調整する。

3）提出漢字について、２）と同じく能力試験３級の出題基準に照らし、「初級修了」時における最低限の習得漢字数を割らない程度に、提出数を削減する。逆に、初級修了レベルとして習得しておくべき漢字が提出されていない場合は加える。

4）能力試験の出題基準になくとも、タイ、アユタヤの学生として知っておくべきだと判断される文法、語彙、漢字が提出されている場合は、削減の対象としない。基準は教師の経験的直観による。(例：「観」は２級相当漢字だが、アユタヤは有名観光地なので知っておくべき)

5）教科書の構成には問題がないと思われるので、これまでのものを基本的に踏襲し、また内容もできるだけ活かして、提出文法項目・語彙・漢字の変更部分のみを修正する。

6）この教科書は作成時期が古いために、ワープロ専用機でしか読み込めない形式で保存されていたので、今後改訂が継続的に、容易になされるよう、汎用性のあるPC用ワープロソフト（Microsoft Wordを採用）の保存形式にして入力し直す。また、レイアウト、フォントの種類、フォントサイズも見やすく、学習に資するものを選択し、統一して入力する。

7）学生にも教師にもより使いやすい教科書を目指し、巻末に提出語彙・表現の索引を加える。

3．改訂作業の手順と方法

上で述べた方針が決定された後、いよいよ作業を開始することになった。以下の表に、作業開始後一年の間に行われた主な作業について、手順と具体的に用いた方法、およびその成果を示す。なお、2002年5月からは、さらに2名のタイ人教師が留学から戻ってきたので、計7名での作業となった。

＜表 改訂作業の手順と方法＞

時期、および作業に使用したもの	作業内容	具体的方法とその成果
2002年3～4月 ・Microsoft Office搭載、かつ日・タイ語が入力可能なPC 2台 ・『日本語能力試験出題基準』 ・「ラチャパット日本語副専攻コース最低目標」 ※ 資料中にタイ国内における主要初級教科書の提出文法についての情報がある。	提出文法・語彙・漢字のリストアップ	表計算ソフトMicrosoft Excelを用い、以下の情報（①～）を入力して各種リストを作成した。
	・文法項目リスト作成	①提出された文法項目（3級出題基準にあるがオリジナル教科書になかった文法も記入。その場合、提出課は0）②その文法項目の表現形式 ③その文法項目を使った例文 ④その文法の相当級（4級／3級難易度低／3級難易度高／それ以上、の4つに分けて記入）⑤オリジナル教科書でのその文法の提出課 ⑥他の主要初級教科書でのその文法の提出課（「ラチャパット日本語副専攻コース最低目標」を参照）
	・語彙リスト作成	①提出された語彙 ②漢字で表記する場合、その読み ③その語彙の品詞 ④オリジナル教科書でのその語彙の提出課
	・漢字リスト作成	①提出された単漢字 ②その漢字が提出されたときの読み ③その漢字が提出されたときの語句 ④単漢字としての音読み ⑤オリジナル教科書でのその漢字の提出課 ⑥その漢字の相当級（3級以下／2級以上）
2002年3月8日 ・提出文法項目リスト	課の数を36から34に削減	提出文法項目リストを資料として、2つの課を1つに結合できるところはないか、提出文法を他の課に分散させてしまえるような課はないかなど、課を減らす方法についてブレーンストーミング。その結果、旧3課と旧4課を結合、旧28課提出の文法を他の課に分散させ、旧28課を削除した。
2002年3月18日 ・提出文法項目リスト	文法の過不足について調整	提出文法項目リストを資料として、不足している文法については採用するかどうか、採用するならどの課に入れるか、過剰な文法については削除するかどうか、削除するなら他の科目（会話や作文）で取り上げるかどうか、一つ一つ検討。
2002年3月 ・提出語彙リスト	語彙の過不足について調整	提出語彙リストを資料とし、検討を始めようとしたが、量が膨大で、かつ文法項目の変更を本文や練習問題に反映させた際に語彙の増減が予想されるため、語彙の検討は一時凍結。

2002年4月22日 ・提出漢字リスト ・ホワイトボード	漢字の過不足について調整	提出漢字リストを資料とし、主に2級以上相当の漢字を削除するかどうか、すべてホワイトボードに書き出し一覧しながら、一つ一つ検討した。その結果、500字以上あった提出漢字が約330字に減った。
2002年4～5月 ・他の主要初級日本語教科書（参照用）	提出文法項目・漢字の変更事項を内容に反映	ここまでに決定した変更事項に沿って、本文会話、文法説明、練習問題を修正、または新規作成。本文会話と練習問題は日本人教師が、文法説明はタイ人教師がそれぞれ担当した。各自分担分が完成したら、それが使用に堪えうるものかどうか他教師にも吟味してもらった。
2002年5月7日	入力時のレイアウト、フォントの決定	見やすいレイアウトを一人が試作して全員で検討。フォントは、学生が文字を書くときの模範となるよう、手書きの文字に近い教科書体を基本とした。「日本語3」からは少しずつ生の日本語にも対応していけるよう、日本語の活字体として最もポピュラーな明朝体を練習問題に採用した。
2002年5月 ・上記と同じ環境のPC4台	決定した内容を入力して保存	6月からの前期に使用する「日本語1」「日本語3」を入力。文書作成ソフトMicrosoft Wordを用い、日本語部分は日本人、タイ語部分はタイ人が担当。巻末の索引も作成した。
2002年8～10月 ・上記と同じ環境のPC4台	決定した内容を入力して保存	11月からの後期に使用する「日本語2」「日本語4」を少しずつ入力。5月の入力時に少々トラブルがあった反省から、1科目につき1枚のフロッピーディスクを保存媒体とし、さらに1課につき1ファイルとした。1ファイル中に日本語部分とタイ語部分があるので、日本語部分を先に入力、その後タイ語部分を入力するようにした。

これらの作業において、提出項目のリストアップや入力など、PCを用いて行う作業は分担して行ったが、それを資料として何かを変更しようというときには、必ず教師全員での会議の場で決定した。

4．反省と今後の計画

ここまで改訂開始後一年の間の動向について報告したが、最初の一年の作業は本当に試行錯誤の連続で、反省点も数多くある。以下にそれらについて述べたい。

反省点としてもっとも大きいものは、まとめ役を作らずに皆が同じ立場で作業をしたために、意志決定やスケジュール管理の面があいまいになってしまったことである。大きい方針は決めたものの、入力の際などはやはりどうしても細かいところで、人によって体裁が異なってしまうので、そういうとき「この体裁で」ときっぱり言う者が必要だった。結局、後で体裁を揃え直すことになり、それにはかなりの時間を要した。また、個々の時間計算の甘さが重なって、使用直前まで作業が終わらず、最終チェックもそこそこに製本した結果、小さいミスが多くなってしまった。さらに、上の表の中でも

少しふれたが、電子入力した際の保存の仕方が人により違ったことが原因で、苦労して入力したものが誤って消去されてしまうということもあった。

これらの反省から、その後作業にあたるときには、筆者がまとめ役を買って出、スケジュール管理やPC等作業環境の整備などに努めた。その結果、スムーズに作業が運ぶようになったと思う。その後、現在にいたるまで、小規模な改訂を継続して行ってきたと先に述べたが、具体的には次のような作業である。日本人教師は日本語ネイティブとして本文会話を見直し、場面設定の不自然さや発話意図からすると不適切な表現となっている部分を直した。タイ人教師はタイ語の文法解説をより適切なものにした。その他、毎学期1冊ずつ共有教科書を用意し、使用してミスなど何か気づいたことがあればすぐに書き留めて、それを長期休暇中に修正できるようにした。本校のティームティーチングという授業形態では、この教科書を同時に使用する教師が多いので、各人の気づきをもらさず拾うためである。

こうして本校のオリジナル初級日本語教科書は、現在も継続的な改訂が順調に進んでいる。今後は練習問題について、より確実な運用能力養成につながるものを目指し、改訂を行う計画である。提出語彙の調整については、この練習問題改訂の後に行われることになるだろう。また、あわせて音声テープ、場面提示絵カードといった周辺教材などにも改訂を加え、充実させていきたいと考えている。

おわりに

以上、本校で行っているオリジナル初級日本語教科書の改訂作業について、方針・手順・方法を簡単にではあるが述べてきた。今後の改訂においてこれらを踏まえることで、RIアユタヤの学生にさらに適した教科書が作り上げられていくことを心から願う。教材の作成や改訂というものは、確かに、学習者のレディネスやニーズ、機関の条件など考慮すべき点が多岐にわたり、作業が煩雑で量も多い。そのため、教材作成あるいは改訂に踏み切れずにいる教師も多いことと思う。だが、筆者は改訂を重ねるたびに、学生の学習がより効果的に行われるようになっていくのを目の当たりにしてきた。どんなに小さなことでもいい。まずは一歩を踏み出すことである。本稿において改訂の具体的な方法を紹介したことが、そうした教師たちの背中を押すことになれば、幸いに思う。

最後になるが、ともに教科書改訂作業に取り組み、教師としての刺激をくださったRIアユタヤの同僚の先生方に、感謝の意を表し、終わりとしたい。

参考文献

岡崎敏雄（1989）『日本語教育の教材』アルク

国際学友会日本語学校（1977）『日本語Ⅰ』国際学友会

国際交流基金・日本国際教育協会編著（2002）『日本語能力試験出題基準 改訂版』凡人社

日本語教育学会編（1991）『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社